

一世を風靡した“流線形”車両

— 急行用電車モハ52形、名鉄850系・3400系 —



1942（昭和17）年10月号の「科学朝日」の表紙に描かれたパシナ形機関車



リニア鉄道館に展示されているモハ52004（2011年撮影）

■名鉄の流線形「なまず」と「いもむし」

1935（昭和10）年8月1日、愛知電気鉄道（愛電）と名岐鉄道（名岐）が合併し、現在の名古屋鉄道が誕生した。

それから2年後、旧名岐の路線であった西部線に登場したのが流線形の車体を持つ850系（モ850形とク2350形）で、各2両が製造された。車体前面上部に3本の白線（ヒゲ）が描かれたことから「なまず」の愛称が付けられた。

1979（昭和54）年に2号編成が、1988（昭和63）年に1号編成が廃車されている。

850系と同時期に旧愛電の路線であった東部線に登場したのが、床下をカバー（スカート）で覆い、連結部を車体断面と同じ幌を備えた3400系（モ3400形とク2400形）で、各3両が造られた。国鉄の「流電」に負けず劣らない優雅な流線形スタイルを持っていた。登場時の濃淡緑の塗色や形態から「いもむし」、あるいは単に「流線」と呼ばれ、人気があった。戦後、中間車を増備して3両（のちに4両）編成で走った。1967（昭和42）年から車体の更新が行われ、正面の窓の形状が変わった。

1988（昭和63）年、全12両のうち第3号編成の先頭車2両を除く、計10両が廃車された。残った2両は保存車両として3401-2401と改番され、1993（平成5）年に登場時の濃淡緑の2色に塗り替えられ、翌年には冷房改造も実施。折からの名鉄創業100年を記念して支線を走行した。2002（平成14）8月に引退し、現在は舞木検査場に保存されている。

（藤井 建）

1930年代（昭和初期）、航空機や自動車といった乗り物をはじめ工業製品などに「流線形」が取り入れられ、日常的に接する機会も多く、「猫も杓子も流線形」と揶揄されるほどの一大ブームを起こした。

空気抵抗を減らし、スピード感を表現する流線形のデザインは、洋の東西を問わず鉄道車両にも取り入れられた。1933年に登場したドイツの流線形気動車「フリーゲンダー・ハンブルグ（空飛ぶハンブルグ人）」を嚆矢とし、蒸気機関車や電気機関車にも流線形も導入された。

日本で有名な流線形機関車といえば、南満洲鉄道（通称：満鉄）の特急「あじあ」の先頭にたった「パシナ形」蒸気機関車であろう。鉄道省（国鉄）でもC53形蒸気機関車の1両を流線形に改造、その後C55形蒸気機関車が21両、電気機関車もEF55形3両が造られ、流線形ブームに追随している。鉄道省だけでなく、私鉄にも流線形車両が登場している。

■急行用電車「流電」モハ52形

1936（昭和11）年、京阪神地区の省線（国電）区間の急行用として製造したのが、流線形電車モハ52形（のちクモハ52形）6両である。当初は「魚雷形電車」と呼ばれたが、後のファンには「流電」と呼ばれ、親しまれた。空襲により1両を欠くが、戦後は阪和線を経て飯田線で活躍し、1978（昭和53）年11月19日に姿を消した。その後、1号車がJR西日本吹田総合車両所に、4号車が佐久間レールパークに保存され、現在は、製造当時の姿に復元され、リニア・鉄道館に展示されている。



「なまず」（上）と「いもむし」（下）
（いずれも神宮前にて撮影・1958年撮影）